

## 助成年度：平成 11 年度

[所属] 東海大学 海洋学部

[役職] 教授

[氏名] 田中 彰 (他計 6 名)

[課題]

### 絶滅が危惧される軟骨魚類の現状評価

[内容]

日本産軟骨魚類リストを作成し、これまでに日本からサメ類 25 科 62 属 126 種、エイ類 18 科 31 属 77 種、ギンザメ類 2 科 4 属 11 種、総計 45 科 97 属 214 種の軟骨魚類が確認されていることをまとめた。また、台湾からはサメ類 25 科 52 属 91 種、エイ類 16 科 24 属 55 種の板鰓類が確認された。このリストを元に北海道から台湾までの各地域で出現種、それらの漁獲状況について調査を行った。

北海道では 15 種、東北地方では 25 種、房総半島周辺からは 84 種、駿河湾から 82 種、熊野灘から 9 種、日本海から 19 種、瀬戸内海から 10 種、四国東岸から 25 種、四国西岸から 23 種、九州東シナ海側から 12 種の軟骨魚類の生息を確認した。

地域により、様々な漁業で混獲される板鰓類の利用状況は異なるが、その中でもホシザメ、エイラクブカ、アカエイ、ガンギエイなどの沿岸種が水揚げされ、有効に利用されている。また、マグロ延縄漁業で混獲される外洋性サメ類が気仙沼に水揚げされ、利用されている。しかしながら、全国的に見て沿岸性のホシザメは減少傾向にあると考えられ、各市場での詳細な水揚げ量の記載が望まれる。アカエイも中部以南では頻りに漁獲されており、地域によっては活魚として高価格で取り引きされているが、水揚げの記録が曖昧であり、正確な水揚げ量は不明である。また、時期や主要対象魚種により漁業形態が変化しており、資源の動向を追うには今回の調査で得られた出現記録を元に、調査地を選定し、漁獲量の推移と漁業形態の変化を把握していくことが必要であると考えられた。